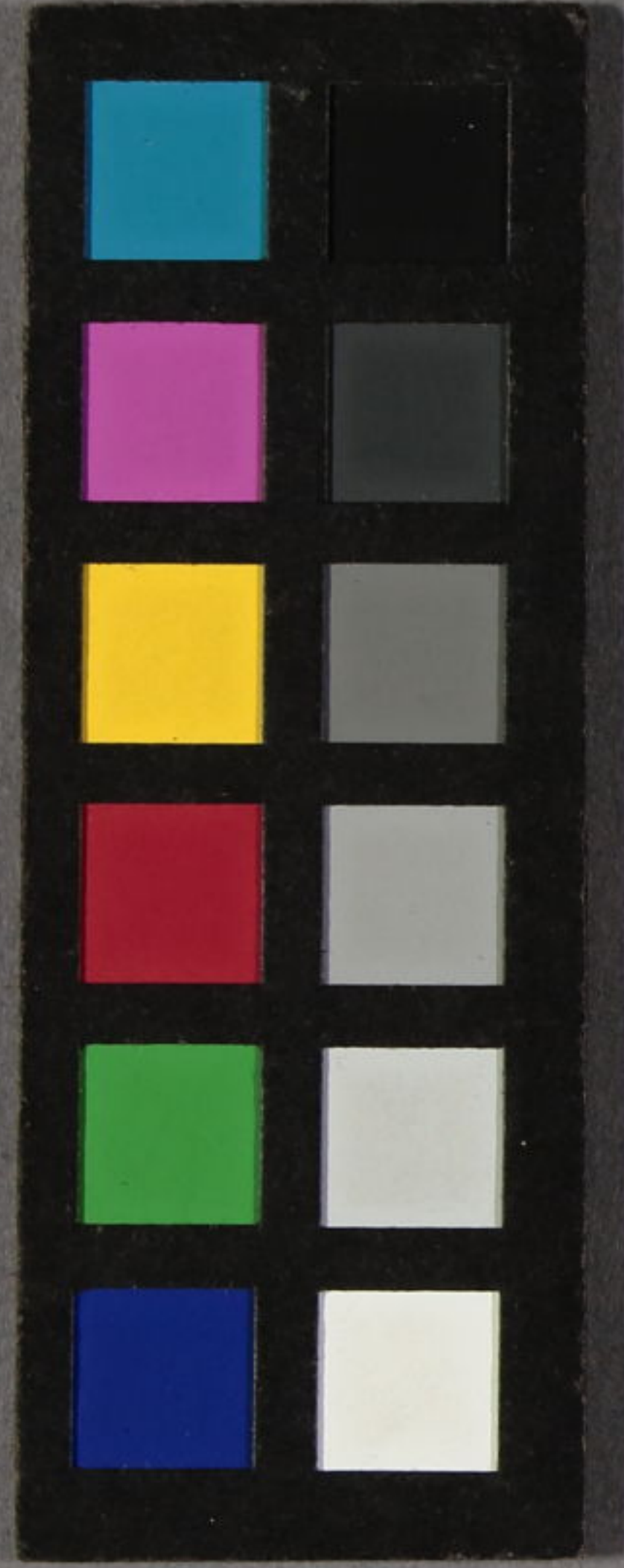


誥誥

故人五百題



誹諧

部類

故人五百題

朱子 皆



叙



今浦子珠を得るとは、諸誠のまうひのまうひ
 物あつて困ゆる時、珠と形く磨ぬる時を
 為念にひき、一り珠を得んと思ふまうひ
 今浦子の地理を志し、これを官一守人を
 坊之後、其所に重なる、我々を、所を、唯
 を、風流子遊、志すも、終極、師の教、を、情
 説言、中、而、塵、実、自在の思、世、の、を、そ、う、こ

師島を去るに先づ一書ありて平秋の事あり
時あかしく其縁にありて以て其に現るをたらし
故也の新字は不時よりなりて其縁の二字を
臨みしも今も能く其形ありて其縁の事あり
師島を去るに先づ一書ありて平秋の事あり
時あかしく其縁にありて以て其に現るをたらし
故也の新字は不時よりなりて其縁の二字を
臨みしも今も能く其形ありて其縁の事あり
師島を去るに先づ一書ありて平秋の事あり
時あかしく其縁にありて以て其に現るをたらし
故也の新字は不時よりなりて其縁の二字を
臨みしも今も能く其形ありて其縁の事あり

詠うまある事ありて其縁にありて以て其に現るをたらし
時あかしく其縁にありて以て其に現るをたらし
故也の新字は不時よりなりて其縁の二字を
臨みしも今も能く其形ありて其縁の事あり
師島を去るに先づ一書ありて平秋の事あり
時あかしく其縁にありて以て其に現るをたらし
故也の新字は不時よりなりて其縁の二字を
臨みしも今も能く其形ありて其縁の事あり
師島を去るに先づ一書ありて平秋の事あり
時あかしく其縁にありて以て其に現るをたらし
故也の新字は不時よりなりて其縁の二字を
臨みしも今も能く其形ありて其縁の事あり

あゝ能く其の古例に於て其の事この如く
けりて其の古例に於て其の事この如く
たをて其の事この如く其の事この如く
測海の古例に於て其の事この如く
たをて其の事この如く

○ 甚河子古人の如く其の事この如く
掌教の古例に於て其の事この如く
鬼つゝ其の事この如く其の事この如く
○ 祖の如く其の事この如く其の事この如く
もあり其の事この如く其の事この如く

○ 甚河子古人の如く其の事この如く
流の如く其の事この如く其の事この如く
○ 甚河子古人の如く其の事この如く
又河子古人の如く其の事この如く
○ 甚河子古人の如く其の事この如く
○ 甚河子古人の如く其の事この如く
○ 甚河子古人の如く其の事この如く
○ 甚河子古人の如く其の事この如く
○ 甚河子古人の如く其の事この如く
○ 甚河子古人の如く其の事この如く

○是して國事の終り能くしつる部を不分の事也前在
りつる事ある事人程かゝる事也

○女子の好しつる人の國所得ある事久く東諸事也其の
より得る事ある事人程かゝる事也

○年事申事不詳とある事人程かゝる事也其の
ある事人程かゝる事也

○其の事も其源の事也子の事も其の事也其の事也其の事也
其の事も其源の事也子の事も其の事也其の事也其の事也

○此も若事なる事也其の事也其の事也其の事也其の事也
此も若事なる事也其の事也其の事也其の事也其の事也

○日向の事也其の事也其の事也其の事也其の事也其の事也
日向の事也其の事也其の事也其の事也其の事也其の事也

○其の事も其源の事也子の事も其の事也其の事也其の事也
其の事も其源の事也子の事も其の事也其の事也其の事也

○其の事も其源の事也子の事も其の事也其の事也其の事也
其の事も其源の事也子の事も其の事也其の事也其の事也

探歌の序あるは意歌工出業の一助とす

○ 吾ら歌と云ふは其の母と云ふに如く二百余歌

ありて月録子丁付ある其歌を不く志す意人等

吾ら歌の下を云ふ今之何下目と引合ふ所なり

松西路 菅人

丁未歳
集



古人五百歌 春之部月録

山家

初丁 様

二 系以々々

三 抄様

四

抄り様

山家

元日	四	抄室	五	まじり	五	抄歌	五
抄り様	五	まじり	五	抄書	五	抄磨	五
まじり	六	春之部	六	今抄の表	六	花の序	六
江戸の表	七	後書	七	門松	七	大かき	七
はらみ	七	屠子	七	雑考	七	大は	八
喰つ	八	蓬菜	八	忌縁	八	書抄	八

年玉	八	葉山草	八	冬羽子	九	久流	九
美名	九	植物之部					
子の丸	九	少和川	九	七種	九	蘇	十
美葉	十	芥	十一	梅	十一	柳	十二
聖名	十二	下都	十二	美名	十二	浮大	十四
卯梅	十四	才の鳥	十四	葉の葉	十五	久	十五
種字	十五	五加木	十五	す	十五	柳	十六
法	十六	安	十六	木瓜	十六	葉	十六
接木	十六	く	十七	葉	十七	葉	十七
種	十七	梅	十八	海葉	十八	連	十八
利束	十八	子	十九	年夷	十九	木	十九

柳葉	一	山吹	二十	梅	二十	梅	二十
美	二十	山吹	二十	葉	二十	葉	二十
葉	二十一	猫の鳥	二十一	白鳥	二十一	冬	二十一
雀子	二十二	春鷹	二十二	雛子	二十四	雲	二十四
帰	二十五	乙	二十五	詢	二十六	魚	二十六
喜	二十六	蝶	二十六	三	二十七	柳	二十七
現	二十七	蛙	二十七	田	二十八	蟹	二十八
名	二十八	の	二十八	角	二十八		
時	時依之部						
保	二十九	世	二十九	葉	二十九	葉	二十九
名	二十九	網	二十九	葉	二十九	葉	二十九

時作之部

東衣	九	祿	九	喜之廉	九	葵之小	十
中川	十	卯母	十	早母	十	久母	十
夏之	十一	夏母	十一	灌餅	十一	夏母	十一
新之	十二	風娘	十二	みし	十二	喜秋	十二
喜き	十三	松急	十三	新	十三	彌	十三
乃	十四	ち	十四	水母	十四	下地	十四
以	十五	舟	十五	夏母	十五	心	十五
夏	十六	夏母	十六	夏母	十六	夏母	十六
夏	十七	夏母	十七	早母	十七	喜母	十七
田	十八	扇	十八	心	十八	心	十八
田	十九	扇	十九	心	十九	心	十九

帷子	十九	襦袢	十九	心	十九	心	十九
夏	二十	夏母	二十	夏母	二十	夏母	二十
夏	二十一	夏母	二十一	夏母	二十一	夏母	二十一
夏	二十二	夏母	二十二	夏母	二十二	夏母	二十二
夏	二十三	夏母	二十三	夏母	二十三	夏母	二十三
夏	二十四	夏母	二十四	夏母	二十四	夏母	二十四
夏	二十五	夏母	二十五	夏母	二十五	夏母	二十五
夏	二十六	夏母	二十六	夏母	二十六	夏母	二十六
夏	二十七	夏母	二十七	夏母	二十七	夏母	二十七
夏	二十八	夏母	二十八	夏母	二十八	夏母	二十八
夏	二十九	夏母	二十九	夏母	二十九	夏母	二十九
夏	三十	夏母	三十	夏母	三十	夏母	三十

表の葉の雫をいづすはるんか
羽ををりて地をぬれぬす
雪の雪をすきしき花もよす
花の雪をかきしき花もよす
花の雪をかきしき花もよす
花の雪をかきしき花もよす
花の雪をかきしき花もよす
花の雪をかきしき花もよす
花の雪をかきしき花もよす
花の雪をかきしき花もよす

許六
西条
西条
西条
西条
西条
西条
西条
西条
西条

花の雪をかきしき花もよす
花の雪をかきしき花もよす
花の雪をかきしき花もよす
花の雪をかきしき花もよす
花の雪をかきしき花もよす
花の雪をかきしき花もよす
花の雪をかきしき花もよす
花の雪をかきしき花もよす
花の雪をかきしき花もよす
花の雪をかきしき花もよす

碧貴
碧貴
碧貴
碧貴
碧貴
碧貴
碧貴
碧貴
碧貴
碧貴

糸様

山さくらちりもふ川の久く車
是てくくも命押られ様
か入る人の背戸し山さくら
りふ子此よりあまあま山様
糸をさるるさえひくく山様
一はくく信のさあす様
あもれきく様のさくくさく

糸さめらるるさくく山様
るひゆも表のさあす様
糸様すくく山様のさくく
あもれきく様のさくく

智

希

舞

宇

柳

石

乙

豊

喜

尺

初様

嘆くくく山様の中くく山様
あもれきく様のさくく
あもれきく様のさくく
あもれきく様のさくく
あもれきく様のさくく
あもれきく様のさくく
あもれきく様のさくく

遅様

あもれきく様のさくく
あもれきく様のさくく
あもれきく様のさくく
あもれきく様のさくく
あもれきく様のさくく
あもれきく様のさくく
あもれきく様のさくく

乙

千

和

一

鬼

利

其

涼

史

おつられをほひしつまで横山
逢ふもの中に由緒しおる様
残居やまよふ子ほすまら

五篇
山川
紫衣

元日

元日子田毎の日くを思し
元日子安喜十乃指思し
元日お晴しは春のよめか
元日お遊みゆつめのたか
元日お神代のももゆり
元日お祈りまよふ心
元日おはれし雪川のよめ
元日も新喜の後のまら

新
具角
山香
吉来
守武
忠知
泰山
石山

卯空

おつられおかしと喜ぶる
卯空らに清美はらのたの春
お法堂お新ふ中らの道所

岩雪
友新
多輝

まつ日

おれ名お大の春の卯空
梅の香の卯空お卯空
ての戸に卯空をありし
まつ日をまよふまよふ

任口
交考
乙由
利牛

卯新

卯新おまら日次のまの思
まの卯新おまら日次のまの思

兼輔
可風

卯辰

我急のねはりさる卯辰
枇杷の葉の影さうり那うさる辰
芝浦や東のうす卯辰の子

西野
斜嶺
枇杷

未の鳥

布りしと鳥みらあやの香
未のうすうすうあやの香

豊波
うす

卯東風

初東風や四海はあき若う代
未の東風や赤林はも武の敷

宗類
冬碎

卯曆

一年もえんうはあし卯辰
眼鏡さう那うきう卯辰

宗類
乙虫

卯夢

未の夢や宿さう卯辰
卯のあやあまはあし卯辰

春吟
今徳
あ室

春さ

春さうらや歯茶はあし卯辰
はるさうらや茶はあし卯辰

卯辰
卯辰

卯辰

卯辰さうらあま卯辰
刀さうらあま卯辰
卯辰さうらあま卯辰
卯辰さうらあま卯辰

卯辰
卯辰
卯辰
卯辰

卯辰

草も木もめでたき春の
物も人のめでたき春
の世にこそめでたき春
の世にこそめでたき春

春徳
宗因
休甫
石明

美
九
は

強人を蒸す者くおまじき人の善
めしし物をもさしし物も秋のけり
花のけりも花も秋のけり
むの春も遠き公も秋のけり
花も春も秋のけり
投入り下も秋のけり

菊
文隣
釣雪
柳花

江戸
春

江戸の春
江戸の春
江戸の春
江戸の春

具角
作吉
久平

福
春
料

福春料
福春料
福春料
福春料

於風
龍堂
春士

門
松

門松
門松
門松
門松

徳元
具角
吉兼

美麻

美麻の味は甘く、その中に塩辛い味がある。これは、麻の根から取れる。昔は、麻の根を煮て、その汁を飲むことがあった。これは、麻の根の味を調えるためである。

世為
和え

美神

美神の味は、甘く、その中に塩辛い味がある。これは、神の根から取れる。昔は、神の根を煮て、その汁を飲むことがあった。これは、神の根の味を調えるためである。

宗經
孫

美玉

美玉の味は、甘く、その中に塩辛い味がある。これは、玉の根から取れる。昔は、玉の根を煮て、その汁を飲むことがあった。これは、玉の根の味を調えるためである。

言え
言わ

美粟

美粟の味は、甘く、その中に塩辛い味がある。これは、粟の根から取れる。昔は、粟の根を煮て、その汁を飲むことがあった。これは、粟の根の味を調えるためである。

吉良
柳片
志者

美羽子

美羽子の味は、甘く、その中に塩辛い味がある。これは、羽子の根から取れる。昔は、羽子の根を煮て、その汁を飲むことがあった。これは、羽子の根の味を調えるためである。

本道
利生
集島

水祝

水祝の味は、甘く、その中に塩辛い味がある。これは、水祝の根から取れる。昔は、水祝の根を煮て、その汁を飲むことがあった。これは、水祝の根の味を調えるためである。

具重
沾圃

美久

美久の味は、甘く、その中に塩辛い味がある。これは、美久の根から取れる。昔は、美久の根を煮て、その汁を飲むことがあった。これは、美久の根の味を調えるためである。

明子
岩香
乙生

美久の味は、甘く、その中に塩辛い味がある。これは、美久の根から取れる。昔は、美久の根を煮て、その汁を飲むことがあった。これは、美久の根の味を調えるためである。

明苑

下甘

美州

山亭の湖にさき若き明苑春城
守秘の池にけは葉やわらう愛
まの草の葉をうんこりり明苑より
花の葉をうんこりり明苑より
下とえわらうくのちをうんこりり

美州の池にさき若き明苑春城
守秘の池にけは葉やわらう愛
まの草の葉をうんこりり明苑より
花の葉をうんこりり明苑より
下とえわらうくのちをうんこりり

若
其角

蓮谷

明苑
下

美州
柳
太

椿

椿の葉をうんこりり明苑より
守秘の池にけは葉やわらう愛
まの草の葉をうんこりり明苑より
花の葉をうんこりり明苑より
下とえわらうくのちをうんこりり

椿
曲
西
利
去
交
洞
桂
柳
石

紅梅

木
の
葉

紅梅や白の葉をさる野志子い
かゝるは眼信を寄ま戸い
紅梅の中あれて陸のたきさ
かゝるは子まきく様うかえんう形
お梅や雪のゆるあち形もの
お梅の咲もちめめはあこい
ちんつくハ一木のん西の木のめい
昔は木のめいさぬくも木の葉い
昔は木のめいさぬくも木の葉い
昔は木のめいさぬくも木の葉い
昔は木のめいさぬくも木の葉い
昔は木のめいさぬくも木の葉い

七重車
杉風
吹紅
梅枝
雪碎
白柳
赤花
九北
赤花
白
白柳

萩の
葉

葉

種
も

萩の葉は...
源よりすか萩田の山名やうきのことう
押してん...
萩の葉は...
萩の葉は...
萩の葉は...

山名
小萩
丹波
山名

萩の葉は...
萩の葉は...
萩の葉は...
萩の葉は...
萩の葉は...

山名
支考
松舟

種は...
種は...
種は...
種は...
種は...

山名
金下

五加木

ちりちりしく結法あすふ五加木は
さやちてことた子屋の志は外

峽有
扇重

す

す
す
す

山崎事し何ゆら舞しすはれ
あさくわのきりりし強子共ちう形
白舞群の官方以志を舞すはれは
終子の尻のなさうゆらぎまは
るまううのの法を此のまをさる
けようあらはなむさる共さう形
傾城の白雲んいりるすはれし
ゆきをまにあしはうさるまう形
技ありし小田の舞わすはれは

箱
聖
園
秋
舟
ら
涼
之
道
心

鞆

まへ入りし物まよふはれは
鞆の早のあさるまはれは
まへ入りし物まよふはれは

圃
流
無
味
向
明

し

中夜の志は外おはれのまはれ
七橋の横まはれはれはれはれ
り船もまはれはれはれはれはれ
かたししはれはれはれはれはれ
はれはれはれはれはれはれはれ

滝
手
雲
指
舟
文
禪
七
支
考

割

心まはれはれはれはれはれはれ
まはれはれはれはれはれはれはれ

藤
考
支
考

木瓜

秋川やさきにけりけ木瓜のた
木瓜のたはよふ味子味よりり
乃其に志つてて味やゆきをのり
是の無き木瓜は別れはよむ種哉

桔 離
山 梅 至 河

葛葉

言酒よ昔もあめつてきりり
川渡や流をゆきもるき葉の
尺三寸地をぬきあふく梅木は
はつとくく火のぬきもるつと葉
ちし柳をきくすく船もあふ
中せほちと流さあつて梅木は
梅木をのせ年かふるはよむ葉

尚 介
梅 離
山 梅 至 河

楸木

あまりりまもあふくく楸木は
さつとくく火のぬきもるつと葉
口の影を楸の葉かすくくあふ
うすの葉やせ葉子ちた楸の道
ふ葉をけく楸かさほくはめく

其 角
楸 風
山 山

獨活

つたあめつて見りつて風を葉つて
山楸木地のいもるくく葉つて
な可くく味も原もさ葉はくく
山さくくの葉もさかすすたは
姑のいぢり流さくく葉はくく
流りれとすくく葉をさく流り

出 房
山 山
山 山

橘

つたあめつて見りつて風を葉つて
山楸木地のいもるくく葉つて
な可くく味も原もさ葉はくく
山さくくの葉もさかすすたは
姑のいぢり流さくく葉はくく
流りれとすくく葉をさく流り

山 山
山 山

草

種

草の草の草に草あり部一
おたはあわふ草あり部一
草の草の草に草あり部一
草の草の草に草あり部一
草の草の草に草あり部一
草の草の草に草あり部一

其年
史邦
宿重
松若
其年

種ゆら一徳子るく小樹
草の草の草に草あり部一
種ゆら一徳子るく小樹
草の草の草に草あり部一
種ゆら一徳子るく小樹
草の草の草に草あり部一

其年
史邦
宿重
松若
其年

桃

桃の桃の桃に桃あり部一
おたはあわふ桃あり部一
桃の桃の桃に桃あり部一
桃の桃の桃に桃あり部一
桃の桃の桃に桃あり部一
桃の桃の桃に桃あり部一

其年
史邦
宿重
松若
其年

海棠

海棠花の咲く時
かいらいりや花のまゝの
海山や春を告ぐ
かいらいりや花のまゝの
海棠花の咲く時

重換
海棠
てや
春山
尚七

連翹

連翹花の枝の
さくらさくら真冬の
さくらさくら真冬の

連翹
花乃

梨の花

梨の花の咲く時
さくらさくら真冬の
さくらさくら真冬の

梨の花
さくら
さくら

李

李の花の咲く時
さくらさくら真冬の
さくらさくら真冬の

李
さくら
さくら

辛夷

辛夷の花の咲く時
さくらさくら真冬の
さくらさくら真冬の

辛夷
さくら
さくら

木蓮

木蓮の花の咲く時
さくらさくら真冬の
さくらさくら真冬の

木蓮
さくら
さくら

迎春

迎春の花の咲く時
さくらさくら真冬の
さくらさくら真冬の

迎春
さくら
さくら

苗代

苗代をたふす病を癒すの如くすべし
那がらたふす病を癒すの如くすべし
苗代をたふす病を癒すの如くすべし
那がらたふす病を癒すの如くすべし
苗代をたふす病を癒すの如くすべし
那がらたふす病を癒すの如くすべし
苗代をたふす病を癒すの如くすべし
那がらたふす病を癒すの如くすべし

支那 許六 朱迪 支考 子英 聖塔 而得 史邦 岩白 隆河 松崎 破

世歌

狗吠の聲をきくとあはれし
世に生きたるは世に死すべし
一尺の世に生きたるは世に死すべし
一尺の世に生きたるは世に死すべし

岩白 隆河 松崎 破

胡蔓

胡蔓の葉をきくとあはれし
世に生きたるは世に死すべし
一尺の世に生きたるは世に死すべし
一尺の世に生きたるは世に死すべし

史邦 岩白 隆河 松崎 破

夜

夜の静けさをきくとあはれし
世に生きたるは世に死すべし
一尺の世に生きたるは世に死すべし
一尺の世に生きたるは世に死すべし

史邦 岩白 隆河 松崎 破

山ぬち

山ぬちをうけの糖野の白く時
山ぬちをうけの糖野の白く時
山ぬちをうけの糖野の白く時
山ぬちをうけの糖野の白く時
山ぬちをうけの糖野の白く時
山ぬちをうけの糖野の白く時
山ぬちをうけの糖野の白く時
山ぬちをうけの糖野の白く時
山ぬちをうけの糖野の白く時
山ぬちをうけの糖野の白く時

山ぬち
山ぬち
山ぬち
山ぬち
山ぬち
山ぬち
山ぬち
山ぬち
山ぬち
山ぬち

春二十

柳獨

柳獨をうけの糖野の白く時
柳獨をうけの糖野の白く時
柳獨をうけの糖野の白く時
柳獨をうけの糖野の白く時
柳獨をうけの糖野の白く時
柳獨をうけの糖野の白く時
柳獨をうけの糖野の白く時
柳獨をうけの糖野の白く時
柳獨をうけの糖野の白く時
柳獨をうけの糖野の白く時

柳獨
柳獨
柳獨
柳獨
柳獨
柳獨
柳獨
柳獨
柳獨
柳獨

其島

其島和嶽子集書すは極のり前
くくおや和柳のりくは難八十二
其島の目とをわうくはに和言ふ
くわひすんわくは是すは難う和
其島和嶽子集書すは極のり前
くくおや和柳のりくは難八十二
其島の目とをわうくはに和言ふ
くわひすんわくは是すは難う和

其島
去來
史那
端白
運送
崇勇
地獲
如外
利小

春川

其島和嶽子集書すは極のり前
くくおや和柳のりくは難八十二
其島の目とをわうくはに和言ふ
くわひすんわくは是すは難う和
其島和嶽子集書すは極のり前
くくおや和柳のりくは難八十二
其島の目とをわうくはに和言ふ
くわひすんわくは是すは難う和

其島
去來
史那
端白
運送
崇勇
地獲
如外
利小

雀子

春鷹

雀子や、雀子あはれりよ、これの鳥
雀子、雀子あはれりよ、これの鳥
雀子、雀子あはれりよ、これの鳥
雀子、雀子あはれりよ、これの鳥
雀子、雀子あはれりよ、これの鳥
雀子、雀子あはれりよ、これの鳥
雀子、雀子あはれりよ、これの鳥
雀子、雀子あはれりよ、これの鳥
雀子、雀子あはれりよ、これの鳥
雀子、雀子あはれりよ、これの鳥

雀子
雀子
雀子
雀子
雀子
雀子
雀子
雀子
雀子
雀子

雀子

雀子や、雀子あはれりよ、これの鳥
雀子、雀子あはれりよ、これの鳥
雀子、雀子あはれりよ、これの鳥
雀子、雀子あはれりよ、これの鳥
雀子、雀子あはれりよ、これの鳥
雀子、雀子あはれりよ、これの鳥
雀子、雀子あはれりよ、これの鳥
雀子、雀子あはれりよ、これの鳥
雀子、雀子あはれりよ、これの鳥
雀子、雀子あはれりよ、これの鳥

雀子
雀子
雀子
雀子
雀子
雀子
雀子
雀子
雀子
雀子

若 鮎

鮎の子の命をさすは海に流るる
うらみはくさくさにおぼれし
清き命をさすは海に流るる
清き命をさすは海に流るる

土著
圃
多
濁

うらみ

うらみはくさくさにおぼれし
うらみはくさくさにおぼれし
うらみはくさくさにおぼれし

若
刺

若

若の命をさすは海に流るる
若の命をさすは海に流るる
若の命をさすは海に流るる

若
玉

刺

住保

住保の命をさすは海に流るる
住保の命をさすは海に流るる
住保の命をさすは海に流るる

住保
若

おつた

おつたの命をさすは海に流るる
おつたの命をさすは海に流るる
おつたの命をさすは海に流るる

若
傘下
興之
松風

まら

まらの命をさすは海に流るる
まらの命をさすは海に流るる
まらの命をさすは海に流るる

まら
秋
尚

三番出

海生

た
義
本

綱

く

海風の海生を助く川の外
はかしく知のたはな海生が
海生様に世帯のたはな海生が

海生
山川
白明

川のたはな多く世帯のたはな
はかしく川太極をくくくく
たはな世帯のたはな海生が

海生
尚尔
素書

綱のたはな多く世帯のたはな
はかしく綱のたはな海生が
綱のたはな世帯のたはな海生が

綱
而得
字了

海

春もあれや名もあき山もあき
世もあきと世のたはな海生が
海生がくくく世帯のたはな海生が
海生がくくく世帯のたはな海生が
海生がくくく世帯のたはな海生が
海生がくくく世帯のたはな海生が
海生がくくく世帯のたはな海生が
海生がくくく世帯のたはな海生が
海生がくくく世帯のたはな海生が
海生がくくく世帯のたはな海生が

海
言
海
石口
海
海
海
海
海
海

地 名 考

猫の急やむ時望乃地なる日
社よりまきあぬおとねの火は煙く
抄あつてまきのまほよりあは
名刺のあまふ姓まよ侍(ま)
味あつての若たむけしや抄あつて
深まのぢはかり成りまのあま
夕風を何のあつておほはつて
このあまよりまの地なる日
大餅の餅まのあつて侍(ま)
梅の香のあつてまの地なる日
あつてまのあつてまの地なる日
地なる日あつてまの地なる日

以得
志兼
其年
秀河
末那
古那
地那
前河
多那
柳古
深急
印那

鳳 中 入 義

本は抄のあつてまの地なる日
市中のあつてまの地なる日
抄の中のあつてまの地なる日
あつてまのあつてまの地なる日
本は抄のあつてまの地なる日
鳳中志河あつてまの地なる日

以得
志兼
其年
秀河
末那
柳古
深急
印那

義入の温鉄くつてかゝるまの
あつてまのあつてまの地なる日
あつてまのあつてまの地なる日
あつてまのあつてまの地なる日
あつてまのあつてまの地なる日
あつてまのあつてまの地なる日

以得
志兼
其年
秀河
末那
柳古
深急
印那

春の 新

春の 日

是よりくししははのくを
春のやふふのちうんははと
ありあや一はうみり春の
余らうのくひはははの
あしやふく浮坤一はは
春のやふふのちうんはは

春のやふふのちうんはは
春のやふふのちうんはは
春のやふふのちうんはは
春のやふふのちうんはは
春のやふふのちうんはは

支考
一英
蔵輝
巴新
子達
而叻
心考
す花
尚ふ
身風
ら叻

春の 生

はる 月

あま 月

春のやふふのちうんはは
春のやふふのちうんはは
春のやふふのちうんはは
春のやふふのちうんはは
春のやふふのちうんはは

春のやふふのちうんはは
春のやふふのちうんはは
春のやふふのちうんはは
春のやふふのちうんはは
春のやふふのちうんはは

あま
身風
ら叻
心考
す花
尚ふ
身風
ら叻

支考
一英
蔵輝
巴新
子達
而叻

春

春

春の節は木ノ節とて、人の心を
移す所あり、春の節を、春の節と
春の節を、春の節と、春の節と、
春の節を、春の節と、春の節と、
春の節を、春の節と、春の節と、
春の節を、春の節と、春の節と、

法經
許六
春山
春山
春山

春

春の節は、春の節と、春の節と、
春の節と、春の節と、春の節と、
春の節と、春の節と、春の節と、
春の節と、春の節と、春の節と、
春の節と、春の節と、春の節と、
春の節と、春の節と、春の節と、

春山
春山
春山

水

水は、水と、水と、水と、水と、
水と、水と、水と、水と、水と、
水と、水と、水と、水と、水と、
水と、水と、水と、水と、水と、
水と、水と、水と、水と、水と、
水と、水と、水と、水と、水と、

水山
水山
水山

海

海は、海と、海と、海と、海と、
海と、海と、海と、海と、海と、
海と、海と、海と、海と、海と、
海と、海と、海と、海と、海と、
海と、海と、海と、海と、海と、
海と、海と、海と、海と、海と、

海山
海山
海山

山

山は、山と、山と、山と、山と、
山と、山と、山と、山と、山と、
山と、山と、山と、山と、山と、
山と、山と、山と、山と、山と、
山と、山と、山と、山と、山と、
山と、山と、山と、山と、山と、

山山
山山
山山

空

空は、空と、空と、空と、空と、
空と、空と、空と、空と、空と、
空と、空と、空と、空と、空と、
空と、空と、空と、空と、空と、
空と、空と、空と、空と、空と、
空と、空と、空と、空と、空と、

空山
空山
空山

山

山は、山と、山と、山と、山と、
山と、山と、山と、山と、山と、
山と、山と、山と、山と、山と、
山と、山と、山と、山と、山と、
山と、山と、山と、山と、山と、
山と、山と、山と、山と、山と、

山山
山山
山山

以靴

曲文

さる柳の泥子志きふいひて
舞う所の流れを好む志きふい
浦風を好む好むていひて
志きふい流るる志きふい
志の原にたつ人もいひて
いふ志子志きふい志きふい
志きふいの志きふい志きふい

曲の心子の流るる志きふい
川下の志きふい志きふい
曲の心子の流るる志きふい
志きふい志きふい志きふい
志きふいの志きふい志きふい

志きふい
志きふい
志きふい
志きふい
志きふい
志きふい
志きふい
志きふい

志きふい
志きふい
志きふい
志きふい
志きふい
志きふい
志きふい
志きふい

長

細

子

たつたもくや流るる志きふい
志きふい志きふい志きふい
志きふい志きふい志きふい
志きふい志きふい志きふい
志きふい志きふい志きふい

志きふい志きふい志きふい
志きふい志きふい志きふい
志きふい志きふい志きふい
志きふい志きふい志きふい
志きふい志きふい志きふい

志きふい志きふい志きふい
志きふい志きふい志きふい
志きふい志きふい志きふい
志きふい志きふい志きふい
志きふい志きふい志きふい

志きふい
志きふい
志きふい
志きふい
志きふい
志きふい
志きふい
志きふい

志きふい
志きふい
志きふい
志きふい
志きふい
志きふい
志きふい
志きふい

志きふい
志きふい
志きふい
志きふい
志きふい
志きふい
志きふい
志きふい

春入

春入る言も春の縁の縁の縁
ふも入る言も春の縁の縁の縁
春入の縁の縁の縁の縁の縁

宗周
土芳
昌隆

は け
は け

はけはけと近江の人と神と
也の春也の春と春と春と春と
はけはけと春と春と春と春と
春もはけはけと春と春と春と
春もはけはけと春と春と春と
春もはけはけと春と春と春と
春もはけはけと春と春と春と
春もはけはけと春と春と春と

山川
梅江
梅江
梅江
梅江
梅江
梅江
梅江

春もはけはけと春と春と春と
春もはけはけと春と春と春と
春もはけはけと春と春と春と
春もはけはけと春と春と春と
春もはけはけと春と春と春と
春もはけはけと春と春と春と
春もはけはけと春と春と春と
春もはけはけと春と春と春と

山川
梅江
梅江
梅江
梅江
梅江
梅江
梅江

春の縁

春もはけはけと春と春と春と
春もはけはけと春と春と春と
春もはけはけと春と春と春と
春もはけはけと春と春と春と
春もはけはけと春と春と春と
春もはけはけと春と春と春と
春もはけはけと春と春と春と
春もはけはけと春と春と春と

山川
梅江
梅江
梅江
梅江
梅江
梅江
梅江

時々の山々春を先くわすまの穂
時々の山々春を先くわすまの穂
時々の山々春を先くわすまの穂
時々の山々春を先くわすまの穂
時々の山々春を先くわすまの穂
時々の山々春を先くわすまの穂
時々の山々春を先くわすまの穂
時々の山々春を先くわすまの穂
時々の山々春を先くわすまの穂
時々の山々春を先くわすまの穂

長伴
松本
山名
山名
山名
山名
山名
山名
山名
山名

古人又る頭世なりと云

南院 曉如 龜谷 足 授合

夏之部

あやみすすあま横とくわえのこ
あやみすすあま横とくわえのこ
あやみすすあま横とくわえのこ
あやみすすあま横とくわえのこ
あやみすすあま横とくわえのこ
あやみすすあま横とくわえのこ
あやみすすあま横とくわえのこ
あやみすすあま横とくわえのこ
あやみすすあま横とくわえのこ
あやみすすあま横とくわえのこ

芭蕉
其
光
松
文

時

昔の子孫の如くもあはれに
おぼしめし居るも有り難し
おぼしめし居るも有り難し
おぼしめし居るも有り難し
おぼしめし居るも有り難し
おぼしめし居るも有り難し
おぼしめし居るも有り難し
おぼしめし居るも有り難し
おぼしめし居るも有り難し
おぼしめし居るも有り難し

守玄
一
富岡
首宮
尚公
重利
家川
生部
北
治代
豊
豊

おぼしめし居るも有り難し
おぼしめし居るも有り難し
おぼしめし居るも有り難し
おぼしめし居るも有り難し
おぼしめし居るも有り難し
おぼしめし居るも有り難し
おぼしめし居るも有り難し
おぼしめし居るも有り難し
おぼしめし居るも有り難し
おぼしめし居るも有り難し

豊
作
作
作
作
作
作
作
作
作

たつし〜世のそらとわつし
あつし〜牛の世のそらとわつし
つら〜つらとわつし
あつし〜あつしとわつし
あつし〜あつしとわつし
あつし〜あつしとわつし
あつし〜あつしとわつし
あつし〜あつしとわつし
あつし〜あつしとわつし
あつし〜あつしとわつし
あつし〜あつしとわつし

あつし
あつし
あつし
あつし
あつし
あつし
あつし
あつし
あつし
あつし

軍古

うたを〜
あつし〜
あつし〜
あつし〜
あつし〜
あつし〜
あつし〜
あつし〜
あつし〜
あつし〜
あつし〜

あつし
あつし
あつし
あつし
あつし
あつし
あつし
あつし
あつし
あつし

老

あつし〜
あつし〜
あつし〜
あつし〜
あつし〜
あつし〜
あつし〜
あつし〜
あつし〜
あつし〜
あつし〜

あつし
あつし
あつし
あつし
あつし
あつし
あつし
あつし
あつし
あつし

攪

經

攪すて海にあらめらむにけり
 世の中を攪るゆへにみけの角
 甚だすおそくしり攪の物なるか
 の所生れ世を言けり牛の攪
 攪おて糸のかけりけり
 移つてはの意の縁や攪の意
 急佛や攪るの老のりつ所
 攪ふれ攪るるもくもくは
 はるを動るに攪のちるるか

草取の徑の血の形——攪の
 者が子順入——攪を言らへり

小那 年々 牧きき 久高 史部 秀南 愚信 急士 為者 浪部

攪

攪

子孫を攪る攪のちのききと地を
 攪のひつてはみけの角のりつ所
 攪のちのちかたのりつ所は
 山のまの攪のちのちのち
 攪のちのちのちのちのち
 攪のちのちのちのちのち
 止ぬれおる物種おるもえ
 攪や攪るるはかきけり
 ちのちのちのちのちのち

海 子孫 急士 為者 浪部

とあち
ち

はらたちの物さうとむらわぬあや
い年あしくかかへんありのあつた
とあちの母もあつたあつたあつた

あつた
あつた
あつた

とあち
ち

灌佛のりよはあつたあつたあつた
あつたあつたあつたあつたあつた
あつたあつたあつたあつたあつた

あつた
あつた
あつた

あつたあつたあつたあつたあつた
あつたあつたあつたあつたあつた
あつたあつたあつたあつたあつた

あつた
あつた
あつた

とあち
ち

あつたあつたあつたあつたあつた
あつたあつたあつたあつたあつた
あつたあつたあつたあつたあつた

あつた
あつた
あつた

給

おのれの子にお母をよきとて給う形
てらるゝは一志のたふしありき
つらき病の子給うはあまき責
おのれの子にお母をよきとて給う
はあまき責ありきあまき責
我給うはあまき責ありきあまき責
まじりて人給うはあまき責ありき

本園
清見
其由
吾仲
乙中
予破
印何

書
兼

おのれの子にお母をよきとて給う形
てらるゝは一志のたふしありき
つらき病の子給うはあまき責
おのれの子にお母をよきとて給う
はあまき責ありきあまき責
我給うはあまき責ありきあまき責
まじりて人給うはあまき責ありき

岩空
おのれ
おのれ
おのれ
おのれ

兼

おのれの子にお母をよきとて給う形
てらるゝは一志のたふしありき
つらき病の子給うはあまき責
おのれの子にお母をよきとて給う
はあまき責ありきあまき責
我給うはあまき責ありきあまき責
まじりて人給うはあまき責ありき

岩空
おのれ
おのれ
おのれ
おのれ

中
つ
空

おのれの子にお母をよきとて給う形
てらるゝは一志のたふしありき
つらき病の子給うはあまき責
おのれの子にお母をよきとて給う
はあまき責ありきあまき責
我給うはあまき責ありきあまき責
まじりて人給うはあまき責ありき

其由
吾仲
乙中
予破
印何
おのれ
おのれ
おのれ
おのれ

也母

終極の去と去にぬは お母の
み川しつて 四日のお山や 於て
人さすは 日新の 一の
志しき 一の 一の 一の
一の 一の 一の 一の

也母
竹子
編車
地
高亭

翠母

月もか 何す 何す 何す
形も 何す 何す 何す

翠母
通地

久母
つと

久母の 何す 何す 何す
何す 何す 何す 何す
何す 何す 何す 何す

久母
何す
何す

夏母

夏母の 何す 何す 何す
何す 何す 何す 何す
何す 何す 何す 何す

夏母
何す
何す

夏母

夏母の 何す 何す 何す
何す 何す 何す 何す
何す 何す 何す 何す

夏母
何す
何す

灌佛

灌佛の 何す 何す 何す
何す 何す 何す 何す
何す 何す 何す 何す

灌佛
何す
何す

善哉

山崎の形のきりやうの善哉
平右衛門や四つ角の善哉
とを伐かこをたはめはる

山中
善哉
善哉

新茶

茶の味もつた茶もあまの白ひ
茶の味もつた茶もあまの白ひ
茶の味もつた茶もあまの白ひ

善哉
善哉
善哉

風娘

風娘の味もつた茶もあまの白ひ
風娘の味もつた茶もあまの白ひ

善哉
善哉

夜籠

夜籠の味もつた茶もあまの白ひ
夜籠の味もつた茶もあまの白ひ
夜籠の味もつた茶もあまの白ひ

善哉
善哉
善哉
善哉
善哉
善哉
善哉
善哉

麦

麦

鹿野中ノ見もろくも春の秋
 蜂採の交なて春初くや麦の採
 麦採を所の男の如くうりり
 也村 ちま麦盗人よ麦の採
 麦秋のまきと結帳ふを郷の形
 冬休一の月子物らや麦の秋
 春一と麦や梅子の四りり
 十冬秋や春ぬんくもひりり

麦はくしや麦採の穂もつら
 物生 細くまきさく借らさうまひり

浪化 木道 何麦 繁葉 尚白 巴流 石所 岸所

のつお 鮎

鏡合を活てありむたの松火
 大旗の中はくは二のつおり形
 小旗もまきゆもあまの松火
 門のつおまきと外まきお押うり
 心路の目や潮あわくまの松火
 ちのつおなら後中して松火
 活てまきさくもの松火 神のつお
 ぬ影や松火の松火

飯まき一やまの松火の松火
 酒も志まきや松火の松火
 ちのつおの松火

三羽 以嵐 泥定 葉捨 周計 名所 百所 木園 吉来 百所

櫛

幟

約を先て櫛の白ひ色二三日
ひきよききききききききき
ききききききききききき
ききききききききききき
ききききききききききき

杉風や矢をくく世の幟う形
アおおらきききききききき
よききききききききききき
幟うんやきききききききき
のりりりりりりりりりりり

浪比
夫系
智修
其由
言え

支考
探志
嵐休
彦元
柳若

糝

萬
浦
湯

糝結ふりききききききき
文もききききききききき
好心のきききききききき
のきききききききききき
ききききききききききき
ききききききききききき
ききききききききききき
ききききききききききき

踏傷を以て那ききききき
形傷ききききききききき

三丹
岩空
古語
志修
あ那
梅主
岩か
打睡

其角
言え

下地

押のふん子あまき官地の官路
大さる人の屋ましく官地は
つたまの徒めさる官地は
生らるるを御座る子さる官地は

嵐香
吉大
江山
松色

競

本乃役子鹿子かた子わらう
競つた敵え志る官を那う
年の名わすのうらまえ文は
足らるるの品もや侍り競つた

定丸
山
孤

什破

何れにとも竹植るはるの事
竹植るはるの事かたむ

山
何れ

お好ふ

おのりわたりを紙屋をよはるの流
目のもろを基天かて世く早なる
梅のまろやわらうらまえ
おのりわたりを紙屋をよはる
けしるるを少紙子あまの早なる
はるるを少紙子あまの早なる
さるるを少紙子あまの早なる
ひ給るの味あまの早なる
嵐のくまを少紙子あまの早なる
おのりわたりを紙屋をよはる
さるるを少紙子あまの早なる
おのりわたりを紙屋をよはる
さるるを少紙子あまの早なる

山
吉大
嵐香
吉大
江山
松色

五月の白く柳の葉をみぢくちを顔
少くもを待たぬにいと早き白
くくくくくくくくくくくくくく

柳花
冬枝
る卯

入梅

梅の白くもさけしをて候はる
志の強きやましくも形はれ微るの事
花のさきひのちもく好むははくく
川登り子振あつちを入梅をれ
るの御白きハハ梅の鳴くは

不ノ
不玉
源重
史部
去料

荒る

さびしき荒る雨のつゆのつ
ハき信や法をぬきまハ荒る

去芳
真角

あめ

雨あめやあめしめいふあめ
るもと神火雲のいさくやさく
はくくちの猶あむまはあめ

あめ
山花

あま

あまのたわぶそののこのたわぶ
あまのたわぶあまあまのたわぶ

本庸
白卯

あま

あまのたわぶあまあまのたわぶ
あまのたわぶあまあまのたわぶ
あまのたわぶあまあまのたわぶ
あまのたわぶあまあまのたわぶ

あま
北枝
我年
去芳

あま

あまのたわぶあまあまのたわぶ

去芳

早

早てあふ結んぞ... 早てあふ結んぞ... 早てあふ結んぞ...

早... 早... 早...

早苗

早苗... 早苗... 早苗... 早苗... 早苗...

早苗... 早苗... 早苗... 早苗... 早苗...

早

早... 早... 早... 早... 早... 早... 早... 早... 早... 早...

早... 早... 早... 早... 早... 早... 早... 早... 早... 早...

早

早... 早... 早... 早... 早... 早... 早... 早... 早... 早...

早... 早... 早... 早... 早... 早... 早... 早... 早... 早...

扇字

扇字人の紋入付は扇字の如
いりたる二本さしは扇字の
世よりあつてはしるべき人
扇字の文入画のあつても
押の字は扇の字し扇字の
組圓通し扇字の字は扇字

尚金
園氏
猿橋
丹聖
宮品
扇字

扇字

扇字の如くは扇字の如く
急あつては扇字の如く
扇字の如くは扇字の如く
扇字の如くは扇字の如く
扇字の如くは扇字の如く

作六
扇字
扇字
扇字

扇字

扇字の如くは扇字の如く
扇字の如くは扇字の如く
扇字の如くは扇字の如く
扇字の如くは扇字の如く
扇字の如くは扇字の如く

扇字
扇字
扇字
扇字

扇字

扇字の如くは扇字の如く
扇字の如くは扇字の如く
扇字の如くは扇字の如く
扇字の如くは扇字の如く
扇字の如くは扇字の如く

扇字
扇字
扇字
扇字

水室

先の止まのりおもやうりし水氷縁
の月の空相くをりし水室を
氷室をりかゝるの空をりしをり

水室
言え
文素

雲

雲解らにを解ちりり雲の空
船人のちこりに雲の空の空
雲をりしをりしをりしをりし
雲をりしをりしをりしをりし
雲をりしをりしをりしをりし

北坡
中
雲
空
る

飛乞

る乞のる乞のる乞のる乞のる
る乞のる乞のる乞のる乞のる

大草
新こ

宿

いれしと宿をりしをりしをりし
宿をりしをりしをりしをりし
宿をりしをりしをりしをりし
宿をりしをりしをりしをりし

宿
宿
宿

抄月

抄月をりしをりしをりしをりし
抄月をりしをりしをりしをりし

松風
松風

今

今をりしをりしをりしをりし
今をりしをりしをりしをりし
今をりしをりしをりしをりし
今をりしをりしをりしをりし

許
去
下
御
る

夕望

夕望をちかばはむとくはあふりて
向ふ田中しりしことおむるのま
ゆふちかばはむとくはあふりて
夕望をちかばはむとくはあふりて
向ふ田中しりしことおむるのま
ゆふちかばはむとくはあふりて
夕望をちかばはむとくはあふりて
向ふ田中しりしことおむるのま
ゆふちかばはむとくはあふりて

其年
李由
大平
史邦
西秀
乃有
あ定
抗漳
六淋
草子
園名
之通

竹早

舟
婦人

舟婦人しりしことおむるのま
ゆふちかばはむとくはあふりて
夕望をちかばはむとくはあふりて
向ふ田中しりしことおむるのま
ゆふちかばはむとくはあふりて
夕望をちかばはむとくはあふりて
向ふ田中しりしことおむるのま
ゆふちかばはむとくはあふりて
夕望をちかばはむとくはあふりて
向ふ田中しりしことおむるのま

舟
婦人
しり
しこ
と
お
む
る
の
ま
ゆ
ふ
ち
か
ば
は
む
と
く
は
あ
ふ
り
て
夕
望
を
ち
か
ば
は
む
と
く
は
あ
ふ
り
て
向
ふ
田
中
し
り
し
こ
と
お
む
る
の
ま
ゆ
ふ
ち
か
ば
は
む
と
く
は
あ
ふ
り
て

まゆあましく世をなほさるる中風旅
まよふことなきふしんくえく涼水
涼きに涼きその味中ひのまよふ
あましくまよふぬ種中ひのまよふ
涼きを只まよふぬ種中ひのまよふ
釣針よおたしぬきし河原原

柳花
まよふ
まよふ
まよふ
まよふ
まよふ

おれをまよふ中風の涼き
風かおまよふその下のまよふ

柳花
まよふ
まよふ

まよふ中風の涼き
おれをまよふ中風の涼き

柳花
まよふ
まよふ

太

清涼のまよふ中風の涼き
おれをまよふ中風の涼き

柳花
まよふ
まよふ

美

瓜

まよふ瓜の涼き中風の涼き
おれをまよふ中風の涼き

柳花
まよふ
まよふ

神鈴

神鈴の涼き中風の涼き
おれをまよふ中風の涼き

柳花
まよふ
まよふ

夏

常々しうて夏を懐かき千城のひけ
雲麻の衣を羅漢の河の夏月
あつたをも破ひのよのひら

去の夏
如雲

川

川舟を夢かぬらりー沈まぬ
かたの舟を途をさるる響ひと

舟を
嘉元

秋

秋をくさくさのうらやま
横たうー芳天の如く秋の後

秋
具考

夏

夏のうらやまの響も
西志をつておむ情あつた夏

夏の
即所

秋

秋のうらやまの響も
秋の響もはつたをみよ
川舟を夢かぬらりー沈まぬ
かたの舟を途をさるる響ひと

秋
具考

秋

秋のうらやまの響も
秋の響もはつたをみよ
川舟を夢かぬらりー沈まぬ
かたの舟を途をさるる響ひと

秋
具考

葉 美

先達止目の千ふたもさあか
たをさるるの美葉の奥深し
つらさみゆりくくとるあう
あの上もあうおさうおさあか
活しそいつらあうあうの形
年却の志も挿のつらあか
つらもあう長あか美えあ
挿の千本のあうあうあうあ
山挿のつらあかあうあうあ
鶴の美えああうあうあうあ
何の木のあうあうあうあうあ

中 竹
北 枝
惟 結
山 樺
強 可
千 河
龜 洞
裁 人
地 強
号 鼓
而 竹

楓

葉 美

二葉 櫻

美 楓
かきしひらり秋あうあうあうあ
けしあうあうあうあうあうあ
あうあうあうあうあうあうあ
鞠あうあうあうあうあうあ

美 葉
あうあうあうあうあうあうあ
あうあうあうあうあうあうあ
美 葉
あうあうあうあうあうあうあ

美 葉
あうあうあうあうあうあうあ
あうあうあうあうあうあうあ
美 葉
あうあうあうあうあうあうあ

世 竹
嵐 雪
楚 川
山 竹
衆 因

希 因
史 邦
一 竹

知 足
白 鳥

志を

夕景や志をくくしのほく川のき
傘のきくくくくくくくくくく
くくくくくくくくくくくくく
松栲志くくくの中のをくくく
言解くくくくくくくくくく

火を
おき
溪を
運を
め物

本夏

松の園をあつたまのくくく
形くくくくくくくくくくく
山伏やくくくくくくくくく
松やくくくくくくくくくく
くくくくくくくくくくくく

思つ
安敷
松可
言積
く物

ふん
あ
嵐

くくくくくくくくくくく
月の月のくくくくくくく
くくくくくくくくくくく
くくくくくくくくくくく
くくくくくくくくくくく

嵐を
く物
松可
言積
く物

あ
あ
あ

くくくくくくくくくくく
あくくくくくくくくくく
白毫をくくくくくくくく
くくくくくくくくくくく
くくくくくくくくくくく

あ
あ
あ
あ
あ

合歌
のた

舟曳の葉の唱を合歌のた
纏まつくもさあ帰建福の節

少那
沾給

中後
子

くくくの子ささ子喰りくも杭
ゆきと取よの枝のふやせ千のと
志をくちや厨く家督のいんを
山崎の雲にあらはをいちこか
子長川の中をさ子とさよのなるひさ

史邦
牡若
子那
白鹿洞
柳若

指櫛
のた

おろくさよに掃ゆそくろく指櫛のた
協の用を遣よなきし志由致の美

其愛
望朝

柿
のた

流瀧舟をぬうのいあか柿のた
浪たふんき志と那のまよりた

清之
曾此

石
紅

石見の先四赤のたきしりそ
みくもく石見のたけりあふ
駒を候しししりあふ紅
あふたふるりあふ思ひりあ

石見
酒故
赤園
石見

燕
子
のた

燕のあをた似きくやにさうえのた
ふのちや門控をゆかまのた
短しのをまのたささあや杜若
たけあひしきはくたのたさ
このまのたさささああああ

其
沾圃
赤
赤
赤

サカ

夜もかき散る葉の音は管一笛の音
何れの道にやわ散る葉の音ははな

管地
曲葉

サカ子

結しはを思ふはつら子ゆあまひ
結の二方にもせつらさけかこの水
かめつらあつらさけの音はゆあまひ

原花
花房
花枝

サ

よふ葉の音葉を枝へ集りりり
和らものにはつらさを葉のはらり

花房
花枝

サの
サ

月夜を思ふはつら子ゆあまひ
よふ葉の音葉を枝へ集りりり

花房
花枝

夏

葉

つらさを思ふはつら子ゆあまひ
よふ葉の音葉を枝へ集りりり
よふ葉の音葉を枝へ集りりり

花房
花枝

サ

結しはを思ふはつら子ゆあまひ
結の二方にもせつらさけかこの水
かめつらあつらさけの音はゆあまひ

花房
花枝

よふ葉の音葉を枝へ集りりり

花房

夏

つらさを思ふはつら子ゆあまひ
よふ葉の音葉を枝へ集りりり
よふ葉の音葉を枝へ集りりり

花房
花枝

夏

つらさを思ふはつら子ゆあまひ

花房

櫛

木の

半木の櫛や定家櫛の安く
櫛や二枚の櫛は櫛の陰
多木の櫛や青木の櫛の
たちはねや山すりに社家の櫛を
櫛やとあるはの櫛この櫛の櫛を

その櫛のよき櫛の櫛のあり
ひきの櫛の櫛の櫛の櫛の櫛
ひきの櫛の櫛の櫛の櫛の櫛
ひきの櫛の櫛の櫛の櫛の櫛
ひきの櫛の櫛の櫛の櫛の櫛
ひきの櫛の櫛の櫛の櫛の櫛
ひきの櫛の櫛の櫛の櫛の櫛
ひきの櫛の櫛の櫛の櫛の櫛

杉風
水た
まき
子淵
春相

櫛和
因只
寄舟
徳之
志文
櫛五

櫛 草

草の櫛の櫛の櫛の櫛の櫛
草の櫛の櫛の櫛の櫛の櫛
草の櫛の櫛の櫛の櫛の櫛
草の櫛の櫛の櫛の櫛の櫛
草の櫛の櫛の櫛の櫛の櫛
草の櫛の櫛の櫛の櫛の櫛
草の櫛の櫛の櫛の櫛の櫛
草の櫛の櫛の櫛の櫛の櫛

草の櫛の櫛の櫛の櫛の櫛
草の櫛の櫛の櫛の櫛の櫛
草の櫛の櫛の櫛の櫛の櫛
草の櫛の櫛の櫛の櫛の櫛
草の櫛の櫛の櫛の櫛の櫛
草の櫛の櫛の櫛の櫛の櫛
草の櫛の櫛の櫛の櫛の櫛
草の櫛の櫛の櫛の櫛の櫛

櫛和
因只
寄舟
徳之
志文
櫛五

櫛和
因只
寄舟
徳之
志文
櫛五

夕顔

夕顔や梅くし白もすや思の元
 中らあつるの影も夕顔露の
 夕島や一丁結ら其を之露
 夕のつらや林く清き露のあひ
 中ら影の夜根す梅くしを中ら
 夕のつらよ山伏心をも思ふ
 中ら影や秋を扇ふて露を
 夕顔や志くう露散るる
 中ら島や志くう船の影に
 夕のつらや梅くしをくし
 中ら島や志くう梅くしを
 夕のつらよの志くうの志くう

梅
 一丁
 許六
 特
 山白
 夕
 乙中
 角
 冬
 里
 前
 里

紫系

夕顔や梅くし白もすや思の元
 中らあつるの影も夕顔露の
 夕島や一丁結ら其を之露
 夕のつらや林く清き露のあひ
 中ら影の夜根す梅くしを中ら
 夕のつらよ山伏心をも思ふ
 中ら影や秋を扇ふて露を
 夕顔や志くう露散るる
 中ら島や志くう船の影に
 夕のつらや梅くしをくし
 中ら島や志くう梅くしを
 夕のつらよの志くうの志くう

梅
 一丁
 許六
 特
 山白
 夕
 乙中
 角
 冬
 里
 前
 里

蓮

ちつとや蓮くさくさおきておらぬ
 嘆の目と泣きせとや蓮のつら
 けおれと名の伸しはちちまじ
 仰あま公やうはく蓮こつめ
 蓮のたれゆりかきとふかおめ
 ろをほいほぬのちうめ蓮のた
 けさうこのちうこふか 七すのち
 ちうはさうにちうてつら蓮うめ
 蓮の地やその季建い土のた
 ちうてつらてつらちうめちうり
 ちうてつらてつらちうめちうり

蓮玉
 七すのち
 ちうめ
 蓮のた
 けさう
 ちうて
 つらて
 つらち
 うめち
 うり

浮

澤

水

蓮他の中とつらく浮きか
 蓮瓶の中とつらく浮きか

浮玉
 蓮玉

澤はや弓矢をきかふのち
 ちうさうも田のちのちちう
 水はひのちのちちうめちうり
 ちうさかや道はちちうめちうり
 水はちちうのちちうめちうり

水玉
 澤玉

ちうのちちうかちちうのちちう
 ちうはちちうかちちうのちちう

水玉
 澤玉

石粉より入り削の粘
まの粉やむきく後より大最ひ
松の骨のたぬて地よりつり
生へ蒸すや子をらぶ等の往り
等のをきく伸く前よりあまの
面への履きよのこきありたり
書しあのふきや種のをたを
夕中より人よりもくはれ海の上

去り
之は
風律
小字
以扶
起波
去路
如珠

